

古今集成立期詩歌の表現方法とその享受

―季節觀念創出と享受としての国語教育―

《総論概説》

本研究は、古今集成立期である、主に平安朝宇多天皇期における漢詩文と和歌を対象にした、表現方法の比較文学的考察である。同時にこのような比較文学的研究が、教育現場の教材としてどのように活用できるかや、音声言語を使用した授業方法論の実践的な展開を国語教育研究的な視点から検討したものである。一般的に、漢詩・和歌・物語の「享受」という領域は、典拠論に始まり、古典研究の上でも様々なジャンル・方法が考えられるが、とりわけ「季節觀念」を日本文化の特徴として捉え、漢詩文から和文への享受、また古典研究から現代の国語教育における享受という、二つの方向性からの考察を展開する。

宇多朝は文学史上において、和歌復興の氣運が急速に高まった時代と位置づけられる。それは、直後の醍醐朝において撰集された初の勅撰和歌集『古今和歌集』により、和歌が宮廷詩として結実することからも理解される。その重要な基盤となったのが、宇多朝における文学的営為であると考えられる。和歌復興は、和文隆盛の顕著な具現化であるが、そこに至る道程は単線的ではなく、むしろ日本漢詩文が中国詩文から学び取ったものを、練化・熟成し、その上で和歌に転化・応用していくという、段階的なものが想定される。このような、漢詩文と和歌相互における作用が、様々な場において表現方法の諸相を見せたのが宇多朝を中心とする時代である。

本研究では、第1篇で、菅原道真の漢詩文に「惜秋」という中国詩文では見られない季節觀念が創出されることを、白居易などにより表現された「惜春」という季節觀念との比較を通して考察する。その際に、外来種で秋の花である「菊」を、嵯峨朝以来行われていた重陽節における漢詩文素材としての表現から、新たな展開を見せたことを重視し、宇多朝の詩宴や道真漢詩文の表現方法を考察した。

第2篇では、『古今和歌集』により平安朝和歌史が始発し、そこに詞華集の和歌配列表現としての季節觀念萌芽を捉えることを前提とする。よって四季歌において、第1篇で検討した「菊」の和歌に注目し、『古今和歌集』での配列や個々の和歌表現の在り方に漢詩文との関係を考察する。その上で、秋上下巻のうちから下巻末の配列を考え、ほぼ「菊」と「紅葉」に限定される素材の中で、どのような季節歌の表現方法があるのかを考える。個々の歌人としては素性・紀友則などの詠法にも注目し、その表現位相にも言及する。更に古今集成立の基盤となる宇多帝を中心とする文学的営為の中から、『寛平内裏菊合』や「宮瀧御幸」などの漢詩と和歌の交流が実際に行われた場の検討をし、その表現方法の影響関係や位相についての考察に及ぶ。享受という点では、後の『蜻蛉日記』に表れる著名な「うつろひたる菊」という語の淵源を探るという視点から、古今集成立期の和歌・物語に遡り、享受側から逆照射した「菊」の表現方法を考察する。

第3篇は、和歌・漢詩の享受を敷衍し、現代の国語教育への活用を考察した教材論と授業方法論である。「古文・漢文」を総称して「古典」と教育課程では呼称するが、その実情は、「漢文輕視」の傾向は否めない。そうした事実への配慮として、「和漢比較教材」と

いう在り方を提唱し、「古文」と「漢文」を相互補完的に融合し教材化することを提案する。更に『古今和歌集』や道真漢詩文を教材論の視点から再考している。また、漢詩・和歌・物語を効果的に学習するための音声言語を導入した授業方法論の展開を考察した。「享受」という視点からすれば、平安朝の物語享受の在り方から「音声言語」による「享受」の重要性も理解される。また漢詩文を訓読以外の様々な方法により「音読」することで、授業の多様化が図られ活性化された漢文授業構築の一助になると考えられる。附篇として添えたのは、第3篇で考察した理論を、実践として教育現場で活用するための方法である。理論的な考え方を示すと共に、実際の学習指導案の展開などに言及している。

以上、『古今和歌集』成立期詩歌における表現方法を比較文学的な視点から考察した上で、そこで生じた「季節観念」が、漢詩と和歌との交流・融合からの創出されたものであると捉えた。更に、後の物語・日記への享受を踏まえ、現代の教育現場における教材論・授業方法論へと発展させた論であると概説することができる。

第1篇「菅原道真の方法」―「惜秋」「残菊」を中心に―

第一章 菅原道真「惜春詩」の形成

―白居易「三月尽詩」の享受をめぐって―

菅原道真の詩文は、白居易の詩句を摂取しているが、その態度は無配慮なものではなく、詩文の本意に立ち入り、自己の抒情をも実現する、創作的なものであったのではないだろうか。本章は、そうした観点から、とりわけ白居易詩文に特徴的な、「惜春―三月尽詩」が、いかに道真の詩に摂取・受容されたかを考察する。

白居易の「三月尽詩」は、三月晦日という一日に集約して惜春の情を述べるところに特徴があり、早くは業平などが、和歌の分野で応用している。道真の詩文に、「惜春―三月尽」観念が見られるものは、十首ほどあるが、特に讃岐下向時代を経て、深い影響が及び始める。この「讃岐下向三月尽詩」(三首)は、道真が左遷同然の不遇を感じていた着任の日付である、「三月二十六日」という限定された日において制作され、自己の境遇を憂い、白髪たることを嘆き、都への思いを募らせるものであった。以後、東宮応令詩に見られるように、「惜春―三月尽」は公の場で観念として定着する。

道真の詩文に見られた、一般的な季節観念に連なり、自己の抒情をも実現していく方法が、その後の漢詩文や和歌へ影響を与え、『古今集』季節歌配列に代表される、王朝季節観念の規範となっていくものと考えられる。

第二章 宇多朝の残菊宴賦詩

我が国の朝廷儀礼として、いわゆる「残菊宴」が行われるようになったのは、公式には村上朝の天曆四年九月廿六日であるとされている。これは重陽宴の代行行事として実施されたもので、実質的な「残菊宴」の起源は宇多朝における賦詩の場が想定されるのではない

いだろうか。

宇多朝においては、嵯峨朝以来賦詩の場として継続されてきた重陽宴の翌日に、「後朝宴」が少人数の詩臣たちを召し、「密宴」として実施されていたことが、従来より指摘されている。さらに、宇多帝代に限って特徴的なのは、九月尽日にかけて菊花に関連する詩宴が断続的に実施されていることである。

このような詩宴の中でも、寛平元年九月廿五日には、公宴として「惜秋翫殘菊」の題で賦詩が行われている。これは、菊を賞美する重陽宴賦詩のあり方を継承しながらも、「時節の移ろい」のなかで「残り咲いている菊を賞美する」といった観念で島田忠臣らによって詩が制作された。この詩題にある「殘菊」の語は、主に白居易の「晚秋夜」(花開殘菊傍疏籬 葉下衰桐落寒井)などの詩語をもとにしながらも、「時間への愛惜」や「草花の賞美」といった白居易において特徴的な詩的主題をも学んだ、忠臣・道真らの宇多朝詩壇の傾向を反映したものであろう。

とりわけ、道真が讃岐から帰任した後は、宇多帝との深い親交の一つの形として、「殘菊を惜しむ宴」がより私性化して行われる。次第にこれは、「九月尽宴」といった要素も兼ね備え、「殘菊を象徴として移ろいゆく秋を惜しむ」といった本朝独自の季節観念を生み出すことになる。本朝「殘菊宴」の創始は、重陽宴の代行行事として村上朝における公式の成立以前に、宇多帝と道真の深い親交と、「菊を好む」といった趣向の一致から、より本来的な意味において、宇多朝詩壇で醸成されていたものと考えられる。

第三章 道真詩における「惜秋」と「殘菊」

菅原道真の詩文に、菊を題材としたものが数多く見られ、主に「殘菊」という語を、白居易・元夢の詩からの受容を契機として独自に展開したことは、既に先学の指摘するところである。さらに、九月尽日宴の創始と、その場で詠まれた詩文が「去りゆく秋への哀惜」を「菊花」に託して詠むことを中心にされていたことが、道真の営為によるものであるという指摘もなされてきた。

本章では、寛平六年九月の『菅家文章』巻五・三八一「暮秋、賦秋尽翫菊(暮秋、秋尽きて菊を翫ぶを賦す)、応令。并序。」において、詩序で述べられている内容に注目し、「秋尽」と「殘菊」という二つの題材を取り合わせる方法について考察を試みる。また、その詩序に示された白居易・元夢の詩文の受容をふまえて、道真が構築した詩的観念に言及し、それが中国詩文やそれまでの日本漢詩文に見えない、新たな季節観の醸成であったことを確認したい。

日本漢詩文の表現史において、「惜秋」の初出は、寛平元年の公宴詩題「惜秋翫殘菊」であるが、それに次ぐものが道真の寛平六年「賦秋尽翫菊」である。道真の「惜秋」を詠む詩は、白居易詩句の措辞を受け、「惜春・三月尽詩」の表現方法の一端を、「秋」の季節に応用したことになる。しかし道真自身の「三月尽詩」は、白居易の詩句のように、尽日という集約した一日を主題とすることにより、截然とした春の終わりを表現するものではなく、自己の慨嘆に基づく「三月尽」であったといえよう。同じように、「惜秋・九月尽」においてもこの傾向は変わらず、むしろ「詩人の感興」に根ざしながら、より独自の

観念を構築し、詩文表現に展開したといつてよい。

とりわけ「悲秋」という、中国詩文に伝統的な季節観念を、「残菊」という自身を対象化した象徴的表現とを対峙させることにより、凋残を旨とする秋の季節観を、賛美する方向に導いたといえるのではないだろうか。

「惜秋」「へとりわけ「悲秋」観念から生ずる「嘆老」「菊花への強い愛着」といった、自己の「詩人の感興」を「双関」させ、秋にあつても、あるいは秋を過ぎても賞美すべき花である「残菊」を据えることにより、「悲秋」を享受した「惜秋」観念が創出されたのではないかと考えたのである。道真の「惜秋詩」は、自己の感慨を融合させた詩的主題の「双関」により、日本漢詩文独自の季節観念を創出したといえよう。

第四章 詩語としての「霜華」の解釈

―菅原道真と白居易・劉禹錫を中心に―

詩語「霜華」の解釈としては、一般的に中国詩文において概ね次の三点を表現するものとすることができる。すなわち、「華」は美称として機能し「霜」自体を指す。「霜」の連想から白く光る「月光」の比喩とされる。「霜」の連想から「鬢」や「鬚」などの「白髪」の比喩とされる。という三点である。

平安朝の島田忠臣・菅原道真においても、ほぼこの三点の用例として使用していることを見ることができる。しかし、道真においては、「白菊」を題材に表現するという詩作の頻度が高いという特徴の中で、「霜華」を「霜のような華」という意味で機能させようとする表現意図を読み取ることができる。この使用例は道真が、その詩語の多様性を理解し駆使したものといえることができる。

こうした「霜華」の多様な使用例が、「陰に陽に」影響を与えて、「心あてに折らばや折らむ初霜のおきまどわせる白菊の花」などの和歌表現を生み出したと考えることが可能なのではないだろうか。「初霜」なのか「白菊」なのか「まどわせる」と、どちらなのかという疑問を呈すること自体が、「霜華」の両義の解釈を反映していると考えられる。「疑」や「誤」などの漢詩文表現が和歌の見立てに影響を与えていることは、これまでも論じられてきたが、詩語レベルで一語の解釈がどちらに傾くのかという疑問自体を和歌表現にしているという考え方ができるのではないかと思われる。

「霜華」は、基本的に「華のように美しい霜」という意味と、その派生的比喩として「月光」「白髪」の意味を表現する詩語であるとともに、「霜のように白く美しい華」という前後の修飾被修飾の関係を反転した比喩表現としても機能していることが、道真の詩文に見られ、詩語としての解釈における多様性が、その後の和歌表現に影響を及ぼしたといつてよいだろう。

第五章 宇多朝文壇の基調

本章では、第一章から第四章までの結びとして、宇多朝文壇の歴史的・文学史的な位置づけと、古今集撰集との関連について、先学の諸説を整理し、本研究の研究史上の意義を

明確にしておきたい。

宇多帝の讓位についての諸説は、おおむね外的事情によるものと、宇多帝自身の内的要求によるものに整理される。中でも、これらを包括し、讓位以後の国政への関与をも説かれる、目崎徳衛氏の論が理解しやすく、氏のいう「強烈な宮廷主義・文化主義的意欲」の貫徹といった点は、非常に重要である。

宇多帝と古今集撰集との問題については、撰集の下命者が醍醐帝であると考えるのが妥当である。しかし、宇多―道真の政治体制は、反動的・逆説的な意味での基盤であると言え、古今集の内容においては、宇多朝文壇が強固な成立基盤となつていているといつてよい。

宇多朝文壇は、道真を中心として、平安初頭の嵯峨朝における漢詩文隆盛の詩壇傾向に憧憬を抱きながら、多くの詩宴を催し、中国文学を積極的に摂取・受容するとともに、自らの漢詩文の中に本朝独自の観念を創出した。さらに、和歌に対しても新たな視座を獲得し、歌合などの宮廷行事を介して、漢詩文の観念を和歌に転化・応用した。こうした宇多朝文壇の営為が、宮廷詩たる精鍊された和歌を成立させしめる基盤となつたのである。

第2篇「古今集四季歌の表現方法―「秋尽」の季節観念創出―」

第六章 平安朝和歌史における季節観念の萌芽

―古今集・季節観念成立の背景―

古今集歌の特徴として、「時の推移」という点が、個々の和歌にも集としての排列の上でも指摘されている。これは、表現構造次元で考えると、「場の連帯」や「時代の風俗」に連なる美的観念世界の言語表現による表出と捉えられる。四季巻に見られる、季節観念は、漢詩文と和歌の密接な交流の上に成り立っている。

中国詩文における季節観念に関しては、「春秋への偏重」という点が指摘されており、古今集の四季もそのような傾向が認められる。その春秋に関する中心的な詩的心情の系譜は、「悲秋」と「惜春」ということになるという。実際、古今集には、このような歌が見られるが、古今集・春秋各上下四巻を貫く主題と考えてよいだろうか。

「悲秋」の和歌は、万葉集には見られず、古今集になつてよみ人しらず歌から見られるものである。これらの歌では、「悲し」という観念を前提とし、様々な景物を通して表現が具体化されている。それが、宇多朝の「是貞親王家歌合」の歌では、心情語に「悲し」以外を用い、新たな展開を見せている。

一方、「惜春」の和歌は、白居易「三月尽詩」の影響を直接受けた業平の歌を始めとして、古今集・春下巻の終末部分に見られる。これらの歌は、全て撰者時代歌人の歌であり、この時代に及んで、「惜春―三月尽」の観念が、定着していることを考えさせる。白居易の詩文は、中国文学史の中でも大きな影響力を持ち得たことが指摘されているが、本朝において、これを顕著に享受したのが、菅原道真であった。

また、春上巻には、「春や花を待ち望む心」が表現されている歌が多く、それは冬巻から循環的に認められる傾向である。秋下巻は、「惜春―三月尽」歌群と整合的に、「惜秋

「九月尽」歌群が見られ、和歌の伝統である「紅葉」を惜しむ心に、九月晦日の心境が付け加されている。

古今集の季節観念は、春上下巻は「望春―惜春」、秋上下巻は「悲秋―惜秋」が中心的なモチーフであり、中国詩文から本朝漢詩文への受容と、和歌との密接な関わり合いの中で生み出されたものである。以下、各章での考察における問題提起として、古今集・季節観念成立の背景を探ってみたわけである。

第七章 『古今和歌集』 菊の歌群攷

―宇多朝文壇の漢詩と和歌―

『古今和歌集』巻五・秋歌下、二六八番～二八〇番の十三首の和歌は、「菊」を主題とした一連の歌群として配列されている。これらの歌の作者は、道真を始めとして宇多帝知遇歌人が多く、作歌の場も宇多朝の歌合で制作されたものが散見される。元来、菊は外来の花であり、古今集の撰歌基準との関連から注目すべきことであろう。

和歌に見られる、「菊」星、「菊」霜といった見立て表現や「延寿思想」は、中国詩文を源泉として、平安初頭期の漢詩文に摂取され、更に道真を中心とする、宇多朝の漢詩文に練化されて表現されたものである。こうした漢詩文の発想を、宇多朝では、「寛平内裏菊合」を始めとする、歌合の場や、宇多帝周辺の私性化された場において、遊戯的な姿勢で和歌表現に転化・応用される。また、宇多朝文壇の道真を中心とする漢詩文に、特徴的に見られた「残菊の賞美」といった傾向から、「無条件に残（色）菊（花）を賞美する」といった限定の中で、「うつろふ菊」が詠歌の素材となっていることも重要な意味を持つ。

『古今和歌集』菊の歌群は、歌材として新しい「菊」を、秋歌の一主題として配列するにあたり、宇多朝文壇における遊戯的な漢詩文と和歌の交流によって詠まれた歌が採択され、秋下巻の中心的な景物となっていると言える。

第八章 『古今和歌集』 秋下巻末歌群の方法

『古今集』四季部において、季節の推移を表現するために和歌が配列されているがゆえに、その巻頭歌群はこれまでに様々な視点から研究対象となってきた。夏・冬の各巻がそれぞれその巻頭に、春秋の名残をとどめた歌が置かれているのに対して、春秋各上巻は、立春・立秋の歌で開始されているのは周知のことである。

このような、巻頭歌群の議論に端を発した配列論や季節観念の構築・勅撰集としての政治性をふまえた論の展開として、対立的かつ整合的とも考えられる巻末歌群は、どのような位置づけができるのであろうか。「季節の到来と辞去」という点に着目し、『古今集』の巻頭巻末に言及した田中幹子氏の論は、「白居易の三月尽詩の截然とした辞去表現に対する感動が、『古今集』の春・秋における立春・立秋で始まり弥生晦日、長月晦日で終わる構成を生み出した」として、白居易詩の影響を大きく取り上げたものである。

本章では田中幹子氏の論を始発とし、春下巻末歌群を、白居易「三月尽詩」の影響下であることは認めつつも、秋下巻末歌群にまで波及して影響下と断言するのは、いささか慎

重である必要があることを検討してみたい。その上で、秋下巻末歌群の表現特徴を分析しながらその方法を指摘し、春下巻との整合性と相違点を明らかにし、どのような季節觀念が表現形成されているかを明らかにしようとするものである。

『古今集』秋下巻末歌群は、春下巻末歌群が表現した「惜春」という季節觀念と対照的に、白居易詩文の影響のみでは考えられない、「惜秋」にともなう「暮秋」という季節觀念を表現しており、個々の和歌は、撰者時代や寛平期を背景に、万葉からの伝統と、中国詩文、日本漢詩文の複合的な発想を表現上に受容し、渾然一体とした中から新たな表現展開をした和歌と位置づけることができると思われるのである。

第九章「形をかけりけるを題にて」攷

一『古今集』二九三番・素性歌の表現位相―

『古今集』に入集歌三十六首を持つ歌人・素性の二九三番歌には、「二条の後の春宮の御息所と申しける時に、御屏風に龍田河に紅葉流れたる形をかけりけるを題にてよめる」という詞書が付されている。これは二条の后のもとにあった屏風にある絵の一部が、そのまま「題」として歌人に与えられ、その絵柄が明らかでないところから歌の眼目が伝わらないために、詞書中に明示されたものである。その和歌表現を解すると、屏風の絵を実景と仮定して詠む方法ではなく、現実の自然とはかけ離れた絵画世界を觀念的に表現して詠んだものと考えられよう。

本論では、この素性の古今集入集歌において、その解釈はもとより、「形」をもとにした「題」を、時間的・空間的に拡大するために導入された漢詩文に拠る觀念領域の拡大を考察することにより、その方法を指摘し、詠歌の対象となつていく絵画を超越した空想的景物を詠むことを、和歌表現が達成していることを明らかにしたいと思う。

『古今集』二九三番素性歌の詞書は、二条の后高子のもとにあった倭絵屏風に書かれている景物「龍田河もみぢ葉流る」という「形」による絵柄が、「題」として与えられたことを示している。それを素性は、詠物歌の方法により作歌するにあたり、漢詩文表現に見られる見立てや対偶性を導入し、觀念領域を時間的・空間的に拡大して表現を展開することを、一首の眼目としたといつてよいだろう。その觀念領域には、「紅葉」の「舟」の見立てにより、「水門」まで流れることを想起させる。また、春の白色な「浪花」と対照的に、秋は紅の「紅葉の浪」が立つことの空想を可能にする。この春秋を対照として扱う方法は、業平歌の背景として見える「紅葉」錦」にも呼応し、漢詩文における「花と錦の見立て」に対応しつつ、和歌における「紅葉と錦の見立て」表現を誘発することにもなる。

こうした場と方法により生み出された詠歌は、「美しく龍田河を彩る紅葉が舟のように流れて、行き着いて止まる先は河口の水門である。その水門には、春の白色に咲く浪花とは対照的に、秋の深い紅色に映える紅葉の浪が立っているのであらうか。」といった觀念的な解釈を要求するものといつてよい。二九三番素性歌は、このような方法を看取できることにおいて、『古今集』における紅葉歌の指標的な存在として位置し、より觀念的な自然詠を可能とする詠法の先駆となつたと考えられる。

第十章『寛平内裏菊合』の方法

―和歌表現の再評価―

仁和四年（八八八年）から寛平三年（八九一年）秋の間に行われたと考えられる『寛平内裏菊合』は、歌合の源流として物合の性質を持ち、その双方が結合する過程を示すものとして史的な意義が認められてきた。萩谷朴氏『平安朝歌合大成』によれば、物合であるが故に歌の優劣は問題とされず、「競技の焦点は完全に菊の州浜にあった」ものと考えられ、歌人や和歌表現にはあまり焦点が当てられてこなかったわけである。

しかしながら、『万葉集』には一首も見られなかった「菊」という素材が、『懷風藻』や勅撰三詩集などの漢詩文では散見され、和歌としては平安朝になり、桓武御製の存在を経て、『古今集』では十三首の歌群が構成されるようになる。この歌群の多くの和歌が漢詩文表現からの影響を受けており、そのうち四首がこの『寛平内裏菊合』の歌である。このように漢詩文の素材であった「菊」を、新規な和歌の素材とするようになってきた時代背景で行われた歌合として、その和歌表現を考察すると、既成の和歌から撰歌したわけではなく、州浜の造形に適合するように新作されたものといえるであろう。その際に、州浜の造形が制作されるための典拠と、表現との適合においては、どのような関連性があったのだろうか。本章では、『寛平内裏菊合』の主として歌人の判明している歌を端緒として、和歌表現の素材となつた漢詩文の典拠やその表現展開について指摘をすることで、歌人としての表現方法・和歌史的意義を浮上させ、「菊」という素材を対象にした、単なる物合ではなく歌合の和歌表現としての再評価を試みてみた。

宇多帝代においては、文芸的趣向の高まりから、漢詩文と和歌の双方への意識が隆起し、道真らによる漢詩文表現の錬磨と共に、歌人たちにより漢詩素材の和歌表現への移植が積極的に行われたといつてよいだろう。『寛平内裏菊合』は、公の場で和漢を対峙すべく、漢詩素材を二通り、即ち、「名所において、掛詞・縁語・物名を駆使しつつ、『万葉集』以来の見立ての伝統を継承しながらも、道真などの同時代の日本漢詩文から発想を得た、菊の見立て表現を取り合わせる」と「嵯峨朝以来の日本漢詩文に定着していた、主に中国の類書に見られる漢籍故事の一場面の解釈を和歌に翻訳する」という方法で和歌表現に転化した趣向を持つ歌合であった。よって単なる物合としての和歌史的評価のみならず、「和漢対峙」という時代的な意義を生み出していく布石となるべき公的行事として、和歌表現史の上で積極的な評価を与えるべきであると考ええる。

第十一章『宮滝御幸記』の叙述と和歌表現

昌泰元年（八九八）十月二十一日から十一月一日にかけて行なわれた、宇多上皇の宮滝御幸は、菅原道真作の『宮滝御幸記』にその記録が残されていたと推測されるが、現在は伝存しない。しかし、『扶桑略記』昌泰元年十月二十日条にその節略文が存し、その内容を知ることができる。また、藤原清輔『袋草子』や、藤原為家『後撰集正義』には和文化

されてその一部が引かれているが、あくまで断片的な資料である。道真作『宮滝御幸記』には和歌が記録されていた旨が知られることから、他に御幸の内容を推測すべき資料は、勅撰集などに収載された和歌ということになる。

本章では、先行研究の視点をふまえつつ、御幸の内容を知る上で主要な資料となる『御幸記略』の叙述を検討すると共に、勅撰集入集の和歌を資料として関連づける。その叙述と和歌表現の解釈・分析を通して、失われた『宮滝御幸記』の片鱗を想定することを試みたい。とりわけ途次より招聘された歌人・素性の存在・役割に注目し、その御幸への参加を契機として、各所で和歌の制作が活性化した状況を指摘する。併せて、道真の漢詩と和歌とを検討することにより、漢詩文と和歌の交流が、この時代にどのように行なわれていたかという文化史的背景をも考察する。

『宮滝御幸記（略）』は、従来より『競狩記』とともに和文脈化の方向性にある漢文体として捉えられていたわけだが、宇多朝・醍醐朝という漢詩文全盛の時代相も考え合わせると、やはり、文体の上で和文脈化というには無理があると思われる。しかし、叙述内容の上で、「公的」から「私的」という変化に於いて、『土佐日記』にも通ずる特徴的な点を指摘することも可能であろう。それは、偶発的であったにせよ宮滝御幸に素性が参加し、和歌制作が活性化したことで、よりそうした傾向が強まったといえよう。漢文表現により提示される客観的な記録描写を、その背後にある和歌表現から逆照射して解釈したとき、そこに和文脈化への契機が多く散在するといつてよい。このことは、まさしく宇多周辺における文芸の特徴ともいえる「和漢対峙」の観念を、結果的に具現化しているということになる。その中で歌人・素性と漢詩人・道真の交流が、和歌と漢詩文の接近を促し、融合へと導くという文化史的意義をもたらすための、一端緒となり得たということも確認できるはずである。

第十二章「うつろひたる菊にさしたり」淵源攷

「『蜻蛉日記』以前の「菊花」関連物語」「伊勢物語」十八段を中心に「蜻蛉日記」上巻の「うつろひたる菊にさしたり」に関しては、五十嵐篤好『蜻蛉日記解環旅寝』以来、「兼家の他の女への心変わりを寓する」や「兼家の愛情の移ろいに、うちおれたわが身をよそえたもの」などに代表されるように、「うつろひたる菊」の寓意を、「変心」と解釈する説が多く見られた。その一方で、後藤祥子氏により「見事に色付いた菊の枝は、男の心変りをむやみに責めるだけの凶器としてではなく、家や庭を繕ってひたすら男の訪れを待つ、いじらし女の閨怨のため息と読めて来はしまいか。」と指摘され、『後撰集』秋下・よみ人知らず（四〇〇）の「何に菊色染めかへし匂ふらむ花もてはやす君も来なくに」を引歌とする解釈が提示された。この後藤氏の論考に導かれて発展的に、武田早苗氏により「変心」と一元的に解する事への危うさが指摘された。

こうした解釈の立場をふまえて、「うつろひたる菊」という和歌素材が、どのような淵源を持つかという点も検討すべき価値があると思われる。なぜなら、「菊」という素材自体が平安朝において和歌に表現されるようになった新規なものだからである。

本章では、後藤氏や武田氏が提示した解釈のよう二重性の寓意があることを支持しつつ、更にこのような「菊」を和歌素材にする淵源には、漢詩文と和歌との交渉による表現

鍊成の結果があることを指摘したい。なおかつ、漢詩文で「残菊」と表現される「うつろひたる菊」が、和歌表現を介して平安朝前期物語において、どのような諸相を見せているかにも言及し、『蜻蛉日記』以前の物語における「菊花」の表現について、いくつかの考察を加えてみた。

『蜻蛉日記』以前の物語として、主に『伊勢物語』第十八段を中心に、人事を詠んだ和歌における「菊の花のうつろへる」の寓意について考えると次のようになる。「紅にほふ」は、「残菊」という漢詩文表現にあるように、変色し照り映えた美しさを讃えて表現したものである。その過程には、詩語の「残」の中国詩における意味合いである「重陽というもつとも人に観賞される時期を過ぎて、観賞価値がなくなった菊として登場しマイナスのイメージを持ち」という「凋残」(しばみ残る)のイメージを、日本的に「遅い時期まで咲き誇る」という積極的な讃美の対象とした道真詩の表現が存在した。そこには、単に和歌や和文表現が道真詩の表現を学んだというのみならず、「紅葉」や「萩の下葉」のように「時間とともにうつろふ」ものを素材として採り上げ賞美するという、旧来からの和歌的な美意識の存在をも併せて考えるべきであろう。よって、「菊の花のうつろへる」は、(植物的な生長過程は別問題として、人間的な鑑賞眼に於いて)衰頹しかかる菊を「変化」として捉えながらも、なお盛りを過ぎても「賞美」とするという表現と捉えるべきである。このことは『古今集』二七九番歌、また同じ歌を含む『平中物語』二十段にも見られるように、宇多帝が出家した後「仁和寺に菊の花を召しける時に」と詞書にもあることから、讓位してなお讃えるべき宇多上皇への寓意も込められたもので、「うつろひてなお盛りなる菊」という讃美を表現したものと解する例からも窺えよう。

したがって、『伊勢物語』十八段の贈答歌「紅にほふ」は、「恋の心が表面に表れてなお盛りなる」ことを表現した歌であるということが出来る。この際、恋の心の比喻として「菊の花のうつろへる」は、「移り気」であると同時に「なお色づいた恋心」を表現していると解するべきであろう。物語ではこの菊に、「なま心ある女」が詠んだ歌が添えられ男に贈られるわけであるが、菊を「雪」に見立てる表現は、『寛平内裏菊合』の左方の歌に見られる、「霜」「浪」「霧」などの見立てと同類の表現と見ることができ、同時代の新規な和歌表現方法を試みている歌ともいえる。それに対して男は、「しらずよみによりける」として「陶潜の故事」をふまえた返歌をする。本朝漢詩文に定着している故事を踏まえた漢詩文翻訳的な含意を、女に対してわかるかどうかと挑戦しているとも解することができよう。

宇多朝に行われた『寛平内裏菊合』は、右方・左方で和漢を対峙する意識に基づき歌が構成されていることは第十章で詳述したが、この十八段の女・男の贈答歌の性質とも対応するのである。『伊勢物語』十八段は、特に宇多帝代の和歌のあり方を反映した歌物語、即ち「女」和歌見立て表現、「男」漢詩文翻訳的表現」といった和漢対峙意識を物語として表現したものであるともいえるのではないだろうか。

以上のように、『蜻蛉日記』以前の物語に表れた「うつろひたる菊」の表現構造を考察した上で、道綱母が「うつろひたる菊」に歌をさして贈る行為は、本稿の冒頭で述べた後藤氏・武田氏などの指摘にもあるよう、「変心(心変わり)」を寓意として表現された和歌であるという従前の多くの二元的な解釈ではなく、「変心」をも認めた上で、「変化してなお盛りなる」自身の心情の表象でもあるとした「二重性」を含んだ表現と解釈すべき

である。これは『蜻蛉日記』に至るまでの「菊」を素材にした和歌や物語と、その表現基盤となった漢詩文の背景から考えて、より同時代的に妥当かつ自然な解釈であると言つてよいだろう。

第3篇 和歌・漢詩の享受と国語教育―教材論 授業方法論―

第十三章 和漢比較教材の有用性

―古文・漢文の均衡と国際化への対応への配慮として―

二十一世紀を迎えた今日において、日本社会の各方面で国際化への対応が論じられている。これは、学校教育においても例外ではなく、国際社会で活躍する日本人を育てるために、「国際理解」と「自国の文化伝統の理解」が求められている。この二点を理由として、現行の高等学校教育課程においても、古典重視の方向が提示されているわけであるが、実際の教育現場では、むしろ、このような理念に相反するような傾向が年々強まっているようにさえ感じられる。さらには、高校における古典教育退行の影響を直接間接的に受け、大学における古典文学全般に対する不人気も顕著であると聞く。

このような教育現場の実情を踏まえると、二十一世紀を担うべき若い日本人が、実学偏重で、社会における文化的背景を無視するような考え方を持つことにより、本質的には国際化に対応できず、国際社会の中で無用の摩擦や誤解を生む一因になるのではないかと懸念される。「国際理解」と「自国の文化伝統の理解」は、双方の相対化・客観化を促進するという意味において表裏一体で機能する理念である。なぜなら、真の異文化理解のためには、自国の文化の本質的な理解が不可欠の前提となるからである。漢文が中国など外国文化との関係において、古文が自国の文化の伝統において、それぞれ理解を深める役割を果たすことは自明であると同時に、その双方が異文化対自国文化という一種の対立関係の相対化を促し、相互に補完し合う融和関係にある教材として活用できると論者は考える。

本章では、このような現状に対する危惧と、古典教育理念を体現する古文・漢文教材の均衡とを視野に入れつつ考察を進める。現行の高等学校学習指導要領をふまえて、その上で、国際化への対応に貢献しうる、和漢比較教材の有用性についての提言を論じる。

こうした和漢比較教材の有用性に基づく学習活動として、「文化の特質を考える」「古文・漢文を読み比べて」「音読・朗読の言語活動を通して」の三点において提言する。これらはもちろん、古典教育における伝統的な訓詁注釈を否定するものではない。これらの方法で、より深い意識を持ちながら、生徒が主体的に文法を含めた解釈に取り組む道筋が、得られるのではないかと論者は考える。従来、文法を中心にした解釈作業のみに終始した古典授業が現場で多く実践され、生徒の古典離れを助長してきたのも事実である。しかしながら、読み味わう意識を刺激することで、興味・関心を増大させ、真に考え味わう古典教育が、実践されるのが理想的である。「古典」の学習から、「伝え合つ」内容を獲得しようとする学習活動を行い、生徒各自の問題意識の高まりを期待したいものである。その問題意識まで導いたところで、生徒が主体的に「古典」の訓詁注釈へ目が向き、真に読む楽しさを発見することを望みたい。訓詁注釈の力は、高校卒業以後の様々な思考・作業に対処するための、基礎的能力であると考えらる故である。

第十四章 『古今和歌集』教材論

―季節觀念の享受という視点から―

古典教育を考えたとき、和歌は必須の教材であるということに異論はないであろう。しかしながら、昨今、和歌教材が古典教育の中で占める位置は、決して大きいとはいえないのが現実であろう。こんな矛盾に発し、古典和歌教材における問題の所在を、明確にしてみた。

中学校・高等学校の教科書を概観すると、古典和歌は、「三大歌集」という括りで、いわば「万葉・古今・新古今」として教材化されているのが一般的である。和歌史に従えば、これも必然な流れと言うこともできるだろうが、「三大」としたときに、三者の「歌風比較」という視点が伴うのも必然である。いうなれば、教材として「文学史的視点」と「比較読み」という二つの価値を同時に含み込んだ教材である。

しかし、その教材価値を活かす際に、配慮が十分でない為に生じる弊害もある。一つに「文学史」的な研究の中で言及されてきた歌風の特徴が「先にありき」で、概念による支配的な教え込みに繋がってしまう危険性である。教材本文を読んだ上で、「この和歌の歌風は」と考えるのではなく、先入観として規定された歌風の特徴に向かって、和歌を読もうとする傾向が見られるということである。

とりわけ『古今集』の評価は、明治時代の正岡子規による酷評が著名であるが為に、子規の評価に何ら疑問も抱かないままに、『万葉』と比べて「くだらぬ集」という方向に向かった読み方が為されてしまうような場合もある。これらの問題は、和歌教材の「読み」から自由を奪い、規定された枠の中で受身的で、問題意識の低い学習を助長するものである。『古今集』を教材としたとき、その和歌の魅力を十分に学習する為にも、広い視野で一首に向き合う必要性を感じるのである。

二つに、教材の配置という視点で中学・高校の教科書を概観すると、和歌教材は、中学三年生と高校一年生という連続した二年間の教科書に配置されている場合が多い。勿論、義務教育とその後という学校制度上では、なお別立てであり隔たりがあるという考え方もあろうが、現状の学校制度を見てみると、中高一貫教育を導入する学校が増加傾向にあることや、高校への進学率がほぼ全入に近い状況を見ると「連続二年間」の教材と考えることもできる。そこで「連続」の意義を十分に活かす教材化が為されているかを検証しておく必要が生じていると思われる。

以上の二点を問題の所在として、本論では日本で初の勅撰和歌集である『古今集』の教材論を展開していく。特に「季節觀念の享受」という古典学習の目標を有効に実践するための提案を述べる。

日本初の勅撰和歌集である『古今集』が提示している、以後の和歌史で規範的な「季節觀念」を学習し享受することで、むしろ新しい視野が獲得できる可能性があるのではないかと思う。「季節觀念の享受」は、単に古典教育のみの問題ではなく、日本文化そのものを考える際の、大きな一指標となるべき普遍性を持っていると考えるからである。

第十五章 菅原道真漢詩文教材論

菅原道真の漢詩文が、日本漢詩文の歴史において不可欠であるのは言うまでもないであろう。道真の歴史上の人物造詣は、「左遷」という悲劇の人物として捉えるのが大勢である。勿論、その前提として「学問の神様」としての天神信仰が存在するのには違いないが、こうした秀才としての本質が神格化されていることによって、むしろ信仰を生み出す要因ともなった「左遷」に焦点が当てられる結果となっているように思われる。したがって教科書に採録される教材も、太宰帥として赴任後の『菅家後集』のものが多いようだ。悲劇の人物としての道真が、何より歴史的に大きな存在となっているようである。

『大鏡』の「菅公配流」にあうように、道真の愛好した草木は「梅」とされることも、一般的には大勢を占めているといつてよいだろうが、道真における漢詩文の素材は、「梅」と同等に「菊」も多い。これは『菅家後集』においても同様であり、自己の姿を「菊」に託し、季節観としても「秋」になお盛りなるといふ象徴性が、道真の精神性に合致している。偶然にも「梅」の逸話が『大鏡』などの歴史物語によって大きな影響力を持った結果、「梅」が取り沙汰されることが多くなったと思われる。

そして何よりも、道真漢詩文における評価は、白居易の漢詩文の影響を受け、時にそれを凌ぐかと言われた表現の豊饒性にあると言えるだろう。平安朝の和歌・物語・日記などの和文ジャンルにも、多大な影響を及ぼした白居易漢詩文は、まずは同形式同ジャンルの道真漢詩文に大きな影響を及ぼしたことは、既に先学の多く指摘するところである。しかし、この影響関係は、あまり教材化の中で活かされているとはいえない。

本章では、日本漢詩文としての道真詩の教材価値、その人物造詣の偏向からくる扱い、漢詩文素材としての「梅」「菊」、白居易詩文との影響関係といった四点を論点として、菅原道真漢詩文の教材としてのあり方について、いくつかの方向性を示唆してみたいと思う。特に「左遷」という悲劇を中心にした道真の人物造詣を活かした上で、「梅」「菊」の愛好に見られるような、自然観賞を重視した漢詩文制作態度も、詩人としての特徴として捉えておくべきではないかと考えたのである。その中でも、白居易がその詩文の中で醸成してきた「三月尽」の季節観念を、春秋対峙的に捉え直し、「九月尽」という日本的な観念として詩文に表現したことは、文化史的な意味も含めて大きな価値を見出すべきではないだろうか。

「漢文」という科目自体の重要性の認識が、教育現場の各所で薄れていく中、復権を求めるには、その教材に含有された力に依拠するのが正攻法であろう。そのような意味でも、「古文」作品との連繫を見据え、歴史的に名高い菅原道真漢詩文を、和漢比較という観点から教材化することは、「漢文」復権の一助になる可能性がある。「国語」という教科の中で、「漢文」を何故学ばなければならないのかという、指導者も学習者も忘れかけている根本的な疑問に、分かり易く応じることができるのが道真漢詩文であろう。菅原道真漢詩文は、まさに「学問」としての何を学ぶべきかという意味を、今に蘇らせてくれる端緒となる教材であると思うのである。

第十六章 中古物語・日記の朗読と国語教育

― 物語・日記の享受と表現学習 ―

高校段階の古典教材を考えたときに、中文学の比率はかなり大きいといえるだろう。その教材を読むための授業は、多くが文法を中心にした解釈作業の繰り返しであり、いわば「精読」のための「精読」ともいえるような授業実践が多いのも事実である。その反面、教材を音読・朗読する行為は、あまり重視されない。たとえ行われたとしても、その設定が曖昧であったり、目的が明確でなかったりする場合が大半であろう。

抑も、中古物語・日記は、「音読」する要素を、その作品として含有しており、「物を語る」という前提で、解釈・享受するというのが基本であるといつてよい。しかしながら、学校教育の中では、前述のようにむしろ知識としての享受が先行している。「朗読」という観点からすれば、俳優の舞台やラジオでの朗読が知られ、仮に教育現場で音声教材で聴く機会があつたとしても、単に聴くための教材と見なされ、学習者が自ら読もうという方向にはなかなかならないのが現状であろう。

本章では、このような「中古物語・日記教材」を扱う授業に於いて、教材をどのように設定し、どのような方法で音読・朗読することにその意義が見いだせるかを考え、その実践的な教材設定の具体的な一例を提示し、朗読することの意義を理論と実践の両面から考察した。

従来、古典学習で「朗読」教材としやすいものとしては、和漢混淆文の『平家物語』や漢詩などの漢文訓読文が多く提案され、それは、その訓読の音律性が朗読する側も聴く側にも一定の強い印象を共有するという、文体上の特徴が活かされた結果である。また軍記物語であれば、登場人物の動きや場面展開の迅速性により、劇的な朗読が可能であり、演出の上での取り組みやすさという点でも朗読向きであるといえよう。もとより『平家物語』に関していえば、琵琶法師の語りにより伝承してきた言語芸術であるがゆえに、声で享受することなくしては作品の深層を理解することは不可能であつたはずだ。

こうした和漢混淆文に比べ、中古物語・日記は、朗読教材にするには難点が多いように受け止められてきた。解釈上の問題も含み、聴くだけでは内容理解には及ばないという点も、学習者には大きな障壁となるであろう。ゆえに冒頭でも述べたように、舞台俳優などの専門の朗読家の手にも委ねられる結果となってきた。しかし、『平家』が琵琶法師の語りによる伝承・享受を繰り返してきたのと同じ理由で、中古物語・日記は、「一次的」「二次的」の差異があるとはいえず、「音読」による享受が繰り返されることにより、その命脈を保ち得てきたともいえるだろう。ゆえに、「音読」から「朗読」という、「理解」から「表現」という過程を経て、学習者が物語・日記を咀嚼する活動が求められると考えている。

古典教育の存在理由を、社会全体が様々な意味で失いかけている中で、自己の中で古典を咀嚼するには、受け身に終始した学習のみでは実現できず、学習者が「主体的な表現」を目指そうとする学習活動が、中高大学を通じてぜひとも必要であると考ええる。

第十七章 漢詩教材音読の理論と効用

― 授業多様化のための一試論 ―

本章は、高等学校や中学校の漢文教育の現場において、漢詩教材を「音読」（字音のまま直読）することの理論と、実践上の効用を提唱したものである。江戸時代以降、多くの学者によって「音読論」が展開されたが、いずれも「訓読批判」の上に立つた論であるため、その普及にまでは至らなかったようだ。教育現場の「国語」という教科の中で、漢文を扱う際には、「訓読」が一般的である。その訓読と相補的に「日本漢字音」を利用した「音読」を実践してもよいのではないだろうか。この実践により、漢詩が本来持つ、中国古典としての「共通・不変なリズム」を再現することができ、音数律（節奏性）次元でのリズムを含めた鑑賞に及ぶことが可能となる。

近時、国際化の視点から「異文化理解」が重要視されるが、漢詩教材の「音読」は、生徒にとって身近に「日本文化の本質」外来文化の摂取・受容」を考える契機となる。 「訓読」という原則を十分に活用した上で、「日本漢字音」という共有化された「音読」を相補的に実践することで、生徒にとって言語や文化を考える主体的な学習が可能となるのである。

第十八章 漢文教材の読解・鑑賞を深める朗読の学習指導

― リズムを重視した漢詩の音読指導論 ―

本章は、前章で述べた授業実践理論を、実情に合わせて再認識し、漢文教材の読解・鑑賞を深める朗読方法を提唱するものである。

近來、教育現場では、国際化への視点から「古典指導の重視」が叫ばれながら、実情は逆行しており、とりわけ、漢文は逆風に曝されていると言わざるを得ない。現行の学習指導要領では、「音読・朗読・暗唱」などを行い、古典に親しみ「読解・鑑賞」を深めることが唱えられている。こうした立場を教室で実践する際に、「日本漢字音」による音読（字音読み）というバリエーションを広げ、訓読と併用し、生徒が主体的に古典を考える素材を提示していく方法として考えてみてはいかがだろうか。さらに、読解・鑑賞を深めるために、翻訳詩を併せて朗読することにより、古典に親しみを持たせることが可能となるであろう。

新時代の古典教育を考えるにあたり、生徒各自の中に、「日本文化とな何であるか」という問題意識が根付いてゆかねばならないだろう。それ故に、漢文教材を不可欠のものと再認識し、授業方法の工夫に力を尽くしていかねばならない。

（第3篇・附篇―授業実践理論と学習指導案―）

第十九章 教室で「読む」ということ

―音読・朗読・暗誦の授業実践を展開するために―

国語の授業は、「読む」ことに始まり「読む」ことで終わる、といっても過言ではないであろう。しかし、その方法があまりにも「文字として読む」ことに偏向しがちであるのも、これまでの国語教育の大きな反省である。いわゆる国語教育で言うところの四領域、「読む」「書く」「聞く」「話す」において、学習者が受け取る側になる「読む」「聞く」が本来は、より同質性のもではないかと考えられる。すなわち、「読む」場合にも、それが黙読であるにせよ、頭の中に「声」が存在するし、「聞く」場合にも、文字が眼前に存在しなくても、頭の中に「文字」が存在する場合が多いからである。また、学習者が発信側となる「書く」「話す」においても同様の対応関係を見ることが可能であろう。このように、国語教育の学習領域は、有機的に関連しており、教室空間では常にこれらが様々に交錯しながら展開しているはずである。本章では、このような理論を、実際に教室で展開する具体的な方法を提示するものであり、特に教壇に立つ際に、指導者が意識しておきたい内容を焦点化して述べる。

「読む」という行為は、決して受け身ではなく、「声」で読むという意味の場合も、「解釈」という意味の場合も、主体的な行為であるといえるのではないだろうか。しかしながら、教室空間では、往々にして「読まされる」という感覚を持つ学習者が少なくないのも現場の事実ではないだろうか。勿論、最初は模倣から「声」に出すこともあるかもしれない。しかし、その「声」に明確な意味が付託していることに気が付くことで、主体的な「読み」に変化していくことが可能なのではないだろうか。逆に言えば、無意識のうちにも「声」に出すことは可能であるが、あくまで受動的な、無自覚な、没個性な読みではない。

国語教育が今後考えねばならないのは、学習者個々の表現活動をどう保証するかだとも言えよう。「言葉」という素晴らしい道具を使って、自己を表現するというかけがえのない行為において、「教室で読む」ということを考えねばならないはずである。

第二十章 古典冒頭文の音読から朗読へ

―解釈作業の介在―

「音読・朗読・暗唱の有効性」について考察する時、その授業実践は段階的に捉える必要がある。それぞれの目的意識を明確にして指導する必要がある。また、なぜ今、音声言語指導を重視しなければならないのかという視点を、古典学習において位置づける必要もある。

文字テキストを「読む」行為は、紛れもなく「解釈」という理解作業が介在する。そこに音声化が加われば、他者が「聞く」ことになり、理解を伝える表現行為に及ぶ。このような立場を、高校古典学習の基礎段階で的確に意識し、声による享受が多かったはずの古典を、文字文化全盛の現代にして理解する礎を築いておくべきであると考ええる。

本章では、高校基礎段階において年間を通して実践でき、なおかつ、応用段階においても有効な朗読指導の実践を紹介しつつ、前述した命題に対する見解を述べる。

古典冒頭文を「音読・朗読・暗唱」する事により、解釈（理解）作業が深まり、高校で学ぶべき古典学習の礎が築かれる。基本単語や助動詞を文脈の中で把握することや、作品の文学史的価値を理解しておくことは重要である。とりわけ、読むことにより体内に定着した文章は、応用段階で何度も反芻され、解釈を始めとする作品理解に有効な材料となる。古典冒頭文には、構造的に生徒を学習に誘う喚起力があることを認めることができるであろう。ひとえに「声に出して読む」行為を授業実践するにも、様々な段階で目的意識を明確にして継続的に行う必要がある。「音読」は理解のための音声化行為であり、「朗読」は理解をふまえた伝えるための表現行為であり、「暗唱」は理解が身体に刷り込まれたことの確認行為である。

古典の授業は、一般的に単語・文法の知識習得のみに偏向しがちである。「解釈」という内容理解作業を介在させ、「音読から朗読へ」と音声化による享受を日常的に授業で実践することによって、生徒個々人が主体的に古典作品に関わる契機を作るべきであると考ええる。